

「第5回専門員会」に関する傍聴者の御意見と傍聴者の質問に対する回答など

| 氏名       | 御意見  | 質問に対する回答など   |
|----------|--|--|
| 1 近藤 ゆり子 | <p>&lt;国交省中部地整への質問&gt;<br/>                     木曾川下流部（木曾成戸地点）での河川維持流量と河川環境<br/>                     ア．木曾川下流部（木曾成戸地点）での河川維持流量が50m<sup>3</sup>/sとされていることの根拠。<br/>                     イ．不特定補給の施設としては味噌川ダムと阿木川ダムが存在する時点で、上記の流量は30m<sup>3</sup>/sとされている。30m<sup>3</sup>/sでは河川環境面からみてどうという問題が生じるのか？<br/>                     ウ．2005年（H17年）6月には、30m<sup>3</sup>/sをも下回ることがあったが、そのことによってどんな問題が生じたのか？<br/>                     エ．「平六湯水」時には、ほとんど水がない状態になった（という新聞記事などがある）が、そのときの環境影響は後（例えば3ヶ月後、翌年）に持続したか？</p> <p>【イ・ウ．の質問の資料】<br/>                     平成22年度（第2回）中部地方ダム等管理フォローアップ委員会資料<br/>                     阿木川ダム 定期報告書概要版（PDF 5.98 MB） p 37<br/> <a href="http://www.cbr.mlit.go.jp/kawatomizu/dam_followup/pdf/h2202_akigawa.pdf">http://www.cbr.mlit.go.jp/kawatomizu/dam_followup/pdf/h2202_akigawa.pdf</a></p>   | <p>&lt;笹森氏の回答&gt;<br/>                     ・河川維持流量の50m<sup>3</sup>/sについては、木曾川水系の水資源開発を行うにあたり、昭和40年の木曾三川協議会において、この地域全体の総意により設定された歴史的経緯があるとともに、その後の河川環境の状況を踏まえつつ全国的に標準的な手法で定められた値であり、河川整備の目標として、木曾川の流水の正常な機能を維持するために必要な流量です。<br/>                     また、河川流量と河川環境の関係については、とりわけ感潮域において非常に複雑であり、十分に解明されている訳ではありませんが、実際に河川流量の減少によりヤマトシジミの斃死など河川環境が悪化しております。なお、河川維持流量の50m<sup>3</sup>/sについては、40m<sup>3</sup>/sまでは新丸山ダム等による不特定補給によって段階的に確保することとし、40m<sup>3</sup>/sを上回る流量については水利用の合理化を促進し、河川維持流量の一部を回復することとしています。</p> |
| 2 石黒 録三  | <p>お世話になってます。<br/>                     8/30 第5回討議の午後の部に参加させて頂いて私の思った事を下手文筆ですが別紙に書きました。よろしく願います。<br/>                     以下資料の項目No.毎に意見を書きます。<br/>                     （別紙）<br/>                     資料 4-2-3 予測を実測データに近づけるためには閉門以前のデータが少ないとの事同感です。現状打開に開門して塩害と生物環境変化の調査を行い、閉門以前の様子を3～5年かけて調査すべきだと思います。ぜひ実施して頂きたい。<br/>                     4-3 堰の運用は調査期間中堰がないものとして、高汐災害発生のおそれのある時の防潮堤の一部として使い、この時も全門完全封鎖でなく、通常潮位変動内で、海水流量が通過する位を全門開けておくことが大切だと思います。<br/>                     4-6 開門方法については、冬季から徐々に行きゆき、春季の雪溶け水の増加に合わせて全開へもって行くこと、これは生物の春季移動の習性に叶っているものです。1年目は堆積物の関係や急な環境変化の影響は予測され好ましい結果は得られないと思いますが、一度夏を越し、秋の降下期を経れば改善されると思います。<br/>                     資料 5-2-1-2)サツキマスの入荷量比較のデータ不足はそのとおりで、「流し網漁法」を良く知る事が必要。水位・流速によって魚の逃げ場が拡大した。つまり、貯水した事で網の流速が遅くなったり、水位が上がった事で網の巾を超えて通過できる場所が増加した事が考えられます。一方海津・海部両郡域は昔から社交儀礼で物のやりとりが盛んで“おつかいもの”という言葉があり市場を通さないで知人縁者を頼って地元流産を直接流通させるケースが多々あり量も多い。特にマスのように高価で喜ばれる物程そのケースが大きいです。<br/>                     5-2-1-3)水道水は取水位置の上・下の関係よりも、よりきれいな所から取るべきと考える馬飼からとってもいい。要は農・工水と上水とは取水条件を全く別物とし明確に区分して取水することが大切です。(料金差が大きい)帳面上の若干の付け替え採作や他の水路との付け替えも若干必要なら実施することもよいと考えます。この事を踏まえて、農水の環境用水への一部転用もあり、単価を下げ余り水を通年農地へ流すのもいいと考えます。<br/>                     5-2-3 塩害について委員発言もあったが 農作物被害の塩害と、水質的に塩分が存在するとした塩害のは事実で 共科学的な塩分量についての話しでないでしょうか、短期間の調査結果で塩分 が計測されたから塩害につながると考えるのは早計だと思う。<br/>                     何百年も続いている耕作の中でしかも今程用水路整備が行き届いてない時代に塩害はどれ程あったのか？本当に河川の底層から田畑の土壌を浸透してきて耕作に影響実被害発生へのメカニズムが解明されているのか、例えばその塩分量が何日続いたら作物に影響がどのような形で発生するものか、実証には時間がかかるので開門調査と平行して実験をするべきだと思います。</p> <p style="text-align: right;">以上</p> |  |